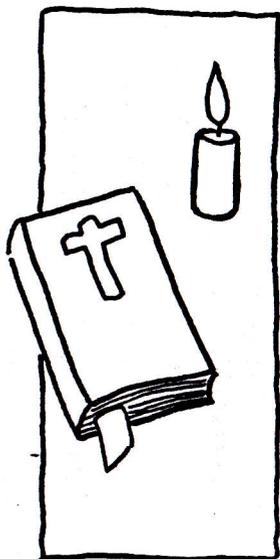


# キリスト教入門講座で

## 学ぶこと(その二)

土屋 至



### ● 入門講座の三つのステージ

キリスト教入門講座は三つのステージからなる。

第一ステージは、「自分と仲間との出会い」である。ここではキリストも聖書も出てこない。ただ、自分を知ることや仲間を知ることにより主眼が置かれている。

第二ステージは、「キリストとの出会い」である。聖書を読むのはこの段階になってからである。最初に新約聖書を読み、旧約聖書も流れに沿って読みすすめていく。

第三ステージでは「教会と出会う」をテーマとし、聖体の秘跡やゆるし、結婚、叙階、塗油の秘跡などを取りあげる。

テキストは特にならない。毎回手作りのプリントと参考資料をコピーして配る。手作りのプリントはワークシートといったらしいだろうか。参考資料は新聞記事など、できるだけ「宗教くさくない」「新鮮なもの」を選ぶようにこころがけている。

講義形式をできるだけ少なくして、作業や問いかけからテーマを始める。参考資料を皆で読み合わせて、感じたこと、考えたことを話し合うことも多い。

机は不要である。椅子だけで一重の円をつくって行く。日本人は、学校教育の習性が身につき過ぎていからか、すぐにノートを取り出す。むしろそれよりもそのテーマに集中して考え、話し合うことに参加してほしい。ノートを取るの自分の考えたことや、皆が出し合ったアイデアをメモ書きにする程度でいい。

### ●——自分との出会い、仲間との出会い

さて今回は第一ステージの紹介をしたい。第一ステージのテーマは以下のようである。

- (1) 出会い——分かち合うことの豊かさ
- (2) 出会い——私たちは三つの世界に生きる
- (3) 感情
- (4) 喜びと楽しみ
- (5) 怒り
- (6) 感動という宝物
- (7) 自分が好きですか——自分がイヤになるとき、好きになるとき
- (8) 自分が好きですか——自己受容の大切さ
- (9) ものの見方を変える——「福音」とは何か
- (10) コミュニケーション——私の中の三人の自分

は参加者同士が知り合うために、また、分かち合いを体験するためにもっとも良い方法であると思う。

二人一組のペアになってそれぞれ質問に答えていき、またペアを変えて次の質問に答える、というものである。一番大事なことは問いかけの内容である。質問は黒板にその都度一つずつ書いていくか、あらかじめ模造紙に書いておいたものを用意する。質問は次のようなものである。

- ・初めてここに参加して私は今、……………な気持ちを感じています。
  - ・最初の「静思のひととき」に私は、……………なことを思い描いていたり、感じていました。
  - ・最近私が感動したことは、……………ということですか。
  - ・最近私が気にしていることは、……………ということですか。
- 毎週、私は、……………をととても楽しみにしています。



- (11) コミュニケーション——聴くこと
- (12) コミュニケーション——素直で率直で誠実な会話のために

- (13) コミュニケーション——自己主張トレーニング
- (14) 「時間」という名の贈り物
- (15) フランクル「夜と霧」を読む

この目次を見て、これがキリスト教入門講座なのかと思う方も少なくないだろう。まず、「神の存在」から説きおこす従来の「公教要理」とはまったく異なったスタイルである。この段階で重視することは、「分かち合うことの喜び」であり、それによる本当の自分との出会い、そして仲間との出会いである。「分かち合いを可能にする雰囲気」が生まれれば、入門講座に毎回参加することが、それ自体喜びとなり、信仰体験そのものであるようになる。

### ●——初めての集まり

「初めての集まり」の進め方について説明しよう。「静思のひととき」「三分間生活報告」に続いて、今日のテーマ「出会い」について簡単に説明し「同心円エクササイズ」を行う。この作業（エクササイズ）

初めは周囲の声が気になって、ちょっと戸惑いを感じるのだが、そのうちに話が弾み、いつしか話しに熱中するようになる。そこがこの作業の不思議なところである。

作業が終わると必ず「見直し」をする。これをしていて何を感じ、何か気づいたことがあるか、話してもらおう。

分かち合いとは何かという説明があつて、「さあ、分かち合いをしましょう」というパターンをよくしてしまいがちである。でもこれではあまりうまくいかないことが多い。知らず知らずのうちに分かち合いをしていて、心を開いて話し合ってしまった後に「今したことが実は分かち合いなのです」というように振り返るほうがずっとうまくいく。

最後に「分かち合いの原則」について説明する。

一、考えや意見を聞くよりも、気持ち、感じていることを聴くことである。自分や相手のもつ気持ちを裁いてはならない。

二、主語は常に「私」である。「あなた」を主語にするとはそれは忠告であり、批判であり、時には相手を責めることになる。「あの人」を主語にするとは

うわさ話になる。

三、自分の感じていること、考えていることを、ありのままに表現することである。飾らずに、これと言ったら皆からどう思われるか、という不安から解き放たれることである。

四、相手をそのまま受けとめることである。忠告、助言、議論、批判などは分かち合いにはむしろ妨げになる。

### ● 知識よりも感性の解放を

「感情」というテーマが四回続くことも、この講座の特徴であろう。入門講座と聞いて参加者が持っているイメージは「聖書の勉強」であり、あるいは知的な学習の場というものである。聖書やキリスト教の教義を講義されるというイメージを持って参加してくる。だからこの「感情」というテーマも意外な感じを与える。

信仰というものには、確かに知的な知識や理論も必要であろう。でもそれ以上に、実は感性の解放の問題であると私は思っている。これまでのカテキズムは知的な側面に偏っていたいなかったらどうか。信仰をあまり

に理屈で割り切ろうとしないなかったらどうか。「感情」というテーマを取りあげながらいつもそう考えてしまうのである。

### ● 神から愛されている自分に気づく

「自分を受け入れる」というテーマも、あるタイプの人を「回心」に導く。

このテーマの第一回目は、「自分がイヤになるとき、好きになるとき」。

まず「現代こき下ろし言葉辞典づくり」という作業から始める。続いて小さなカードを何枚か配り、「どういうときに自分がイヤになるのか」を一枚のカードごとに一ポイント書いてもらう。それを集めて全部そのまま読みあげる。

さらに今度は「自分が好きになるとき」ということを同じように繰り返す。

入門講座では人数が少ないのでこの作業はそれほどうけることはないのだが、高校の「倫理」の授業でこの作業をするとなぜか大うけである。「自分がイヤになるとき」のカードには、たとえば「鏡を見たとき」「体重計に乗ったとき」とか「パパとケンカしてパパ

をどなったらパパが落ち込んでしまった」というのが出てきて、読みあげるたびにどつと笑いとなるのである。「自分がイヤになるとき」という、本当だったら暗いテーマなのにこんなに大笑いしてしまうのはなぜだろう、と生徒に問いかけることにしている。

このテーマの第二回目は「自分を好きになるために」ということで、いくつかの文献を読む。

アントニー・デメロ著『小鳥の歌』より「変わってはいけない」という詩を読んで終わる。「神さまあなたはこんなやり方で私を愛してくださいっているのですね?」というところを読むと、いつも胸にこみ上げてくるものを禁じ得ない。感動的な詩である。

私の講座ではなく、昼間の講座でこんなことがあった。そこには重い障害を持った青年が参加していた。いつもやっと通ってきていたが、クラスではほとんど何も語らず、何を考えているのかわからなかったという。ところがこのテーマについてのクラスで、突然彼は不自由な言葉で、たどたどしく語りだした。

彼は今まで自分がこういう体で産まれてきたことを憎んでいた。親を憎み、他人をうらやみ、自分を蔑んでいた。でも、ここで初めてこんな自分でも神さま

に愛されているということを知ったというのだ。こういう自分だからこそ、その分、皆から愛されているということに気がついたというのである。

そして青年は、それからその講座には現れなかった。しばらくたって彼が亡くなったということを知った。

その担当者は涙を流して語ってくれた。「自分の生を憎み、親を怨んで死んでいくのと、最後にでもそれを受け入れて、そのような生を感謝して死んでいくのでは、それこそ天国と地獄の差がある。入門講座を担当して初めて『救われる』ということはどういうことかを実感できた」と。

〔次号につづく〕

（つちゃ・いたる／清泉女学院中学・高等学校教諭）

